

ASH2016 報告

横浜市立大学附属病院

血液リウマチ感染症内科 萩原 真紀

今回 San Diego で開催された ASH に参加させていただきました。San Diego は思ったよりも 1 日の寒暖差が激しく、早朝のセッションでは肌寒く感じることも多かったです。日中はあたたかな日差しに照らされた海辺のキラキラした景色を眺めるのがとても気持ちよかったです。私自身 ASH への参加は 2 回目でしたが、前回とかわらず、会場の広さ、参加者の多さに圧倒され、会場にたどり着くのも一苦勞、という状態でした。

私は JALSG AML201 のデータを解析させていただき、「急性骨髄性白血病 (AML) において寛解導入療法後 Day15 の骨髄芽球の残存は長期予後に関連する」という演題でポスター発表をさせていただきました。AML の寛解導入療法において、治療開始早期の骨髄中芽球の割合が寛解率のみならず、長期予後にも影響するという報告が散見されていることから、AML201 study に登録された症例での後方視的解析を施行しました。この結果、寛解導入療法後早期の骨髄評価として、Day15 の骨髄中芽球 5%未満は短期的な寛解率のみならず、OS、RFS などの長期予後とも関連がみられました。特に染色体リスクの中間群で予後との関連が強く認められ、blast5%以上の群では第一寛解期に同種移植を施行後も有意に予後不良という結果でした。

JALSG AML201 で多数症例の解析を行わせていただくのは初めての経験で、貴重なデータを扱わせていただき、ASH での発表の機会も得ることができ、JALSG の先生方並びに症例登録された先生方に大変感謝しております。今後ともご指導ご鞭撻賜りたくお願い申し上げます。